研究発表(2)

幼稚園のクラスの名前はどのように付けられているか

徳田克己

はじめに

私は幾つかの幼稚園文化に関する研究を行っている。たとえば、計量言語学的手法を用いた幼稚園の園歌の歌詞分析を行い、園歌には特定の言葉が歌詞に出てくる傾向が強いこと、「みんな」「げんき」「なかよし・なかよく」「うた」が六～七割の園歌に出てくること、育てるべき子どもの姿は「あかるく」「やさしく」「にこにこ」した「よいこ」であることなどを明らかにした。また、幼稚園の運動会における保護者の席取りについて詳細な調査を行い、運動会の当日の早朝から父親が席取りのために並ばなくてもよい方法を提案した。本稿では、園歌と同様に、幼稚園の教育方針が反映されていると思われるクラス名称の付け方について分析した結果を紹介したい。

方法

埼玉県の私立幼稚園の団体が主催した新任保育者研修会において、筆者が担当した講義時間内に受講者に対して質問紙調査を行った。回答者は約七百名であったが、同じ園からの出席者の回答を整理し、一園一回答とした。その結果、三百七十名（園）の

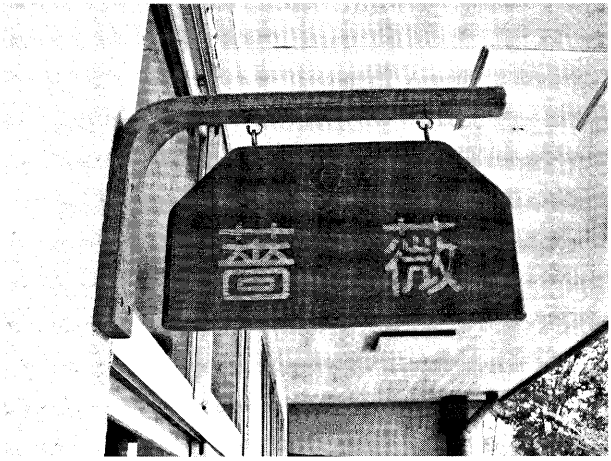
有効回答を得た。

結果の概略

① クラス名称の内容は、植物が最も多く、次いで、動物、自然、果物・野菜、色、その他であった。

② 表記は、ひらがながほとんどであったが、カタカナや漢字も少数ながらあった。「向日葵（ひまわり）」「菫（すみれ）」「楓（かえで）」「藤（ふじ）」「桔梗（ききょう）」「蒲公英（たんぽぽ）」「雛菊（ひなぎく）」などは複数の園で採用されていたが、幼児では読むことは無理である。「蒲公英」は大人でさえ読み書きすることが難しい。漢字を用いている幼稚園では現在、漢字教育に力を入れている、あるいは過去に力を入れていた所がほとんどであった。また「ちゅーりっぷ、ちゅうりっぷ、チューリップ」「すみれ、スミレ、菫」「かなりや、かなりあ」などのように表記が複数あるものがあった。

③ 植物は、「すみれ、以下すべて別表現同意味を含む」（百八十五園）、「さくら」（百五十九園）、「たんぽぽ」（百三十九園）、「もも」（百三十三園）、「ゆり」（百三十二園）、「ばら」（百十九園）、「ひまわり」（九十三園）、「ちゅうりっぷ」（八十園）、「うめ」（七十六園）、「ふじ」（七十園）、「きく」（六十八園）、「すずらん」（三十二園）、「たけ」（三十二園）、「まつ」（二十六園）などが多かった。「ひなぎく」「なでしこ」「あいりす」「サルビア」「カトレア」「サフラン」など、子どもにはなじみが薄いと思われるものがあった。子どもが日常にあまり接しておらず、イメージをしにくいこれらの植物がクラス名に付いているケースでは、その名前が単なる符号となっている傾向がある。



▲写真１「薔薇組」 漢字教育に力を入れている幼稚園である。もちろん子どもたちは読めないが、絵とマッチングさせて覚えるため、すぐに読めるようになるという。

④ 動物では「うさぎ」(七十三園)、「りす」(六十二園)、「ぱんだ」(三十三園)、「きりん」(三十園)、「ぞう」(二十園)などの親しみのある動物がほとんどであったが、「こまどり」「ちどり」「ちゃぼ」などのなじみが薄いと思われるものがあった。

⑤ 自然では、「ほし」(四十六園)、「つき」(四十四園)、「にじ」(二十二園)、「そら」(二十園)、「ゆき」(十五園)、「やま」(七園)が多かった。「かぜ」「いずみ」「はやし」「すばる」「いけ」「うちゅう」などもあった。

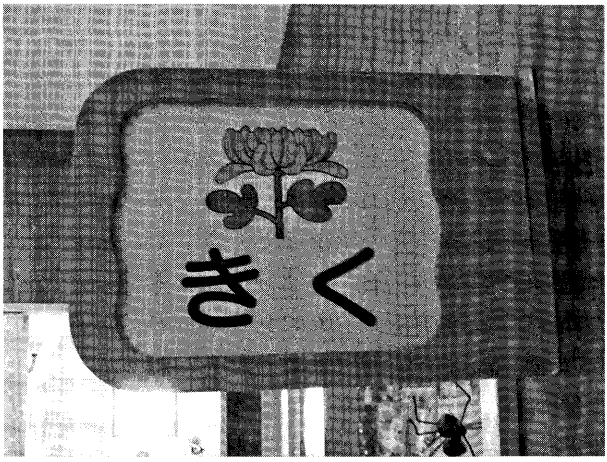
⑥ 果物・野菜では、「もも」(二十六園)、「いちご」(二十三園)、「みかん」(十五園)、「りんご」(十一園)などが多かった。「きいちご」「ブロッコリー」などもあった。通常、カタカナ表記をする「めろん」「れもん」「おれんじ」「ぱいん」「とまと」「ぴーまん」「れたす」などがひらがな表記されていた。子どもたちがあまり好んで食べないピーマンやトマトなどの野菜がクラスの名前に付いている子どもたちは、最初はクラスの名前を嫌

がるが、徐々にがんばってその野菜を食べるようになるという保育者からの報告があった。

⑦ その他では、「ひかり」「のぞみ」の乗り物、「かごめかごめ」「おはじき」「すきっぷ、スキップ」などの遊び、「シンデレラ」「ガリバー」「ハイジ」「ダンボ」などのキャラクター、「ゆめ」「あい」などの抽象イメージがあった。

⑧ 年長、年中、年少別にクラス名称を見ると、年長＋年中の名称と年少の名称が使い分けられている傾向があった。「ゆり、ばら、ふじ、きく、あやめ、まつ、たけ、うめ、きりん、ぞう、ぞう、はと、ほし、つき、やま、そら、にじ」は年少ではほとんど使われていなかったが、「たんぽぽ、つくし、ちゅうりっぷ、うさぎ、りす、ひよこ、いちご」はほぼ年少のみで使われていた。果物・野菜のクラス名はほとんどが年少組であった。

⑨ 「もも一組」「もも二組」のように数字を用いている名称が十二園にあった。クラスの個性が表



▲写真2「きく組」 菊はきれいで上品な花であるが、葬儀などで目にすることが多いためか、若い保育者や保護者には「暗い」印象があるようだ。調査でも「変えてほしい」という新任保育者の意見が最も強かった名前。

れないという理由から数字を付けるクラス名に対して否定的な意見をもっている保育者が十二園のうち十園にいた。「すみれA」「すみれB」のように英字を用いている園は二園であった。B組とD組は間違いやすく、子どもたちが混乱することがあるという意見が保育者から出された。このように数字やアルファベットを用いた場合には、学年単位で子どもを集合させるときには「ももぐみさん、あつまれ！」、縦割りで子どもを集合させるときには「一組さん、あつまれ！」と、声をかけることができるから便利である、という意見があった。

⑩　自分の勤務する園のクラス名称についての保育者の意見を総括すると、ポジティブに評価している保育者がほとんどであった。特徴のある意見として「『なでしこ』を子どもが見たことがないのでイメージができず、覚えにくいようだ」「つぼみ組のつぼみを絵で表現しようとして非常に困っている」「毎年、子どもたちがクラス名を話し合って決めている」「『きく』は暗いイメージがあり、保護者から別の名前の方がいいと言われたことがある」「『まつ、たけ、うめ』は古くさい」「メロンやパインはカタカナ表記にすべき」などがあった。

まとめ

この研究を企画するにあたって、各園のクラスの名称の付け方には創設時の理念や教育方針が色濃く反映されていると推測していた。しかし、その傾向はほとんどなかった。多くの園長・設置者は「先代、先々代が付けたクラスの名前を自分が変えることに大きな抵抗がある」と感じているようであった。特に、難しい漢字を用いている園、子どもにな

じみがあまりないものを名前に用いている園、「まつ、うめ、きく」などの地味なイメージの名前を用いている園では、その園で働いている保育者や子どもの保護者から「変えてほしい」という要望を出されているようであり、それだけに悩みは深いようである。

▲写真３「ほうれんそう組」　子どもたちに身近な野菜である。年少組のクラス名。入園当初はほうれん草を食べるのが苦手な子どもが多いが、「クラス名だから」と、ほとんどの子どもがほうれん草を好きになると言う。

確かに、どのようなクラスの名前であっても子どもたちはその名前が好きになり、自分のクラスとしてのアイデンティティをもっていく。しかし、それは結果論である。大きくなるに従って慣れていったということである。子どもは自分がよく知っている、そして大好きな動物や花がクラス名に付いていることがとにかくうれしく、それだけで新年度に幼稚園に行くのが楽しくなるようだ。帽子に書いてある「パンダ組」という文字や教室のドアの上に描いてあるいちごの絵がうれしくて仕方ないのである。

おそらくは何歳になっても忘れることのない幼稚園のクラス名である。園長・設置者の先生には、子どもたちが楽しくなるようなクラスの名前を付けていただきたい。

（筑波大学　人間総合科学研究科　子ども支援学）